

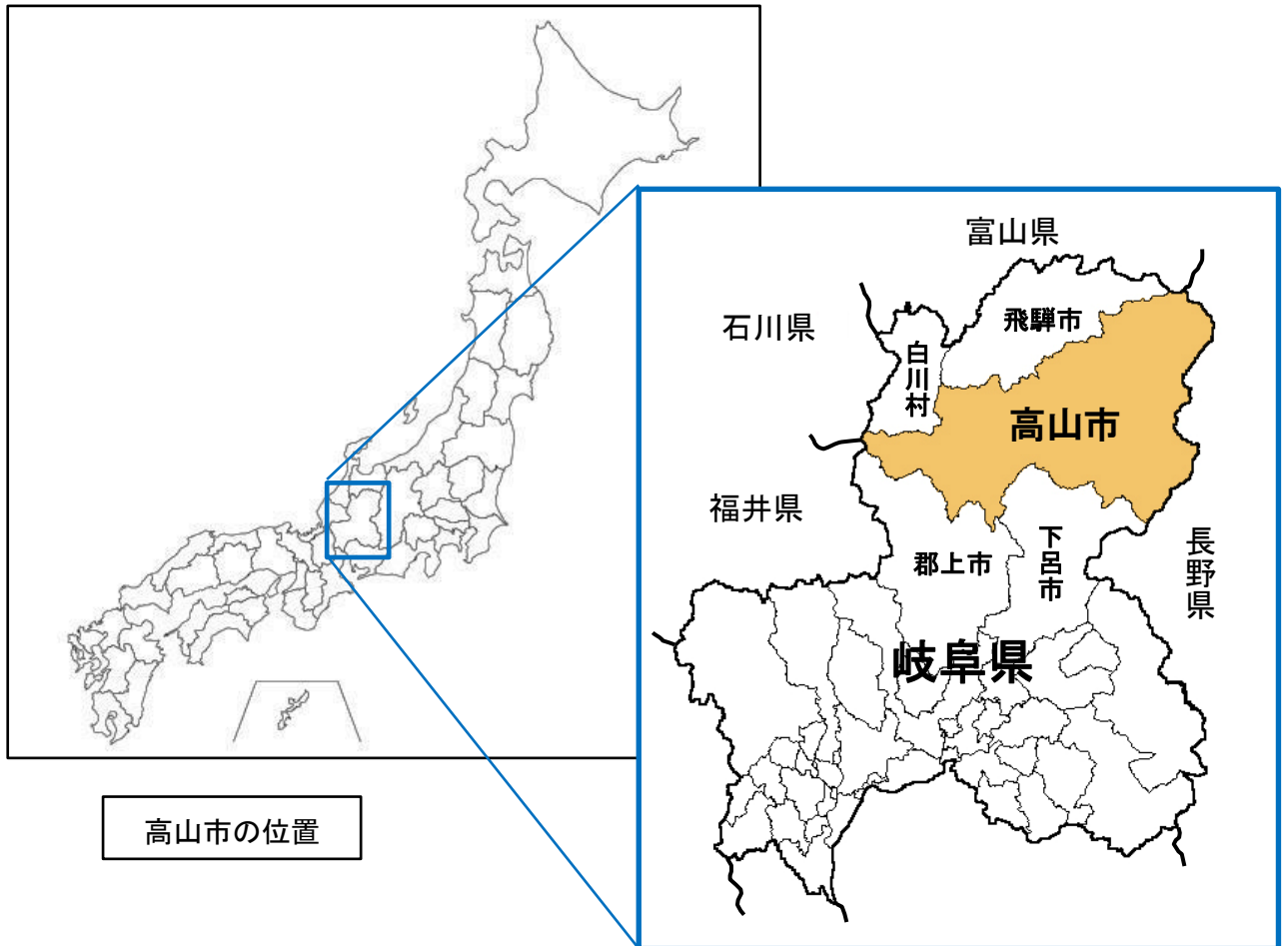
# 第1章 高山市の歴史的風致形成の背景

## 1. 自然的環境

### (1) 位置

高山市は、岐阜県の北部、飛騨地方の中央に位置し、岐阜県飛騨市、下呂市、郡上市、大野郡白川村、長野県、富山県、福井県、石川県と接している。

市役所本庁所在地は、東経 137 度 16 分、北緯 36 度 09 分、海拔 573mに位置する。



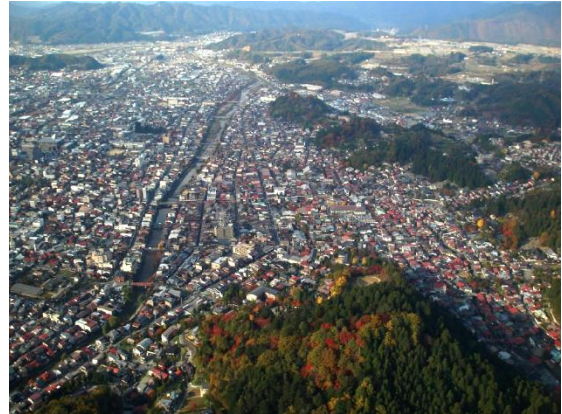
### (2) 地理・地形

高山市は、東西に約 81km、南北に約 55km あり、面積 2177.61 km<sup>2</sup>の日本一広い自治体である。面積の約 92%は森林で占められ、山や川、溪谷、峠などで地理的に分断され、標高差も 2,000m を超えるなど、地形的に大きな変化に富んでいる。

北東部には槍ヶ岳、乗鞍岳、穂高連峰などの飛騨山脈（北アルプス）を擁し、中央部には宮川が南から北へ流れ、南部には飛騨川が北から南へ流れ、南西部には庄川が南から北へ流れている。標高の最高は奥穂高岳の 3,190m、最低は上宝町吉野の 436m である。市街地が属する高山盆地は、飛騨山脈（北アルプス）の傾動、上昇運動による傾動地塊の緩傾斜面に位置している。反対側（長野県側）の急傾斜面には、糸魚川—静岡線に沿う松本盆地が発達している。松本盆地に比べて、高山盆地の規模は小さく、

形は複雑である。

高山盆地は一般的に、宮川、川上川、大八賀川沿いに発達する完新世(厚さ 4~10mの沖積層)の平坦地(海拔 560~600m)を指しているが、より広義には盆地西部の中山丘陵、東部の城山、江名子、山口、北山の各丘陵地も含めた海拔 750m 以下の地形ととらえられる。盆地北東部にひろがる広大な上野平の台地も含めると、古高山盆地ともいえる更に広い盆地構造が存在したと考えられる。

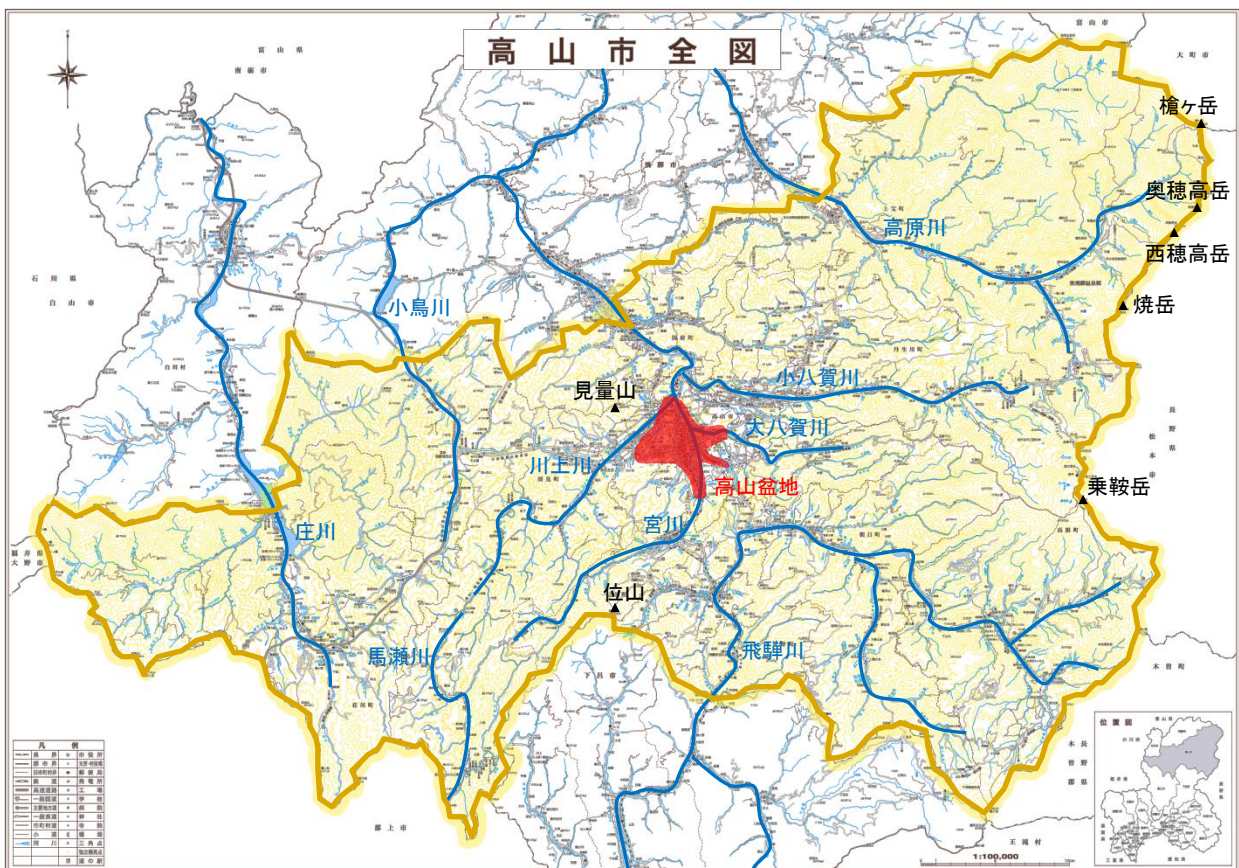


高山盆地(南から)

高山盆地は、北側は見量山から東へ延びる山稜と千光寺山から西へ続く山稜、西側は清見町方面へ高度を高める山地、東側は高度を上げつつ飛騨山脈へと続く山地、そして南側は東方向へ延びる位山山脈によって囲まれている。

位山山脈は海拔 1,000~1,200m の山稜で、太平洋側と日本海側の分水界となっている。盆地の平坦面から高度差約 300m の直線状の急崖が続いている。これは、第四紀更新世初頭以後の江名子断層の活動によって、徐々に形成された傾動、隆起地塊であり、高山盆地は江名子断層の活動で相対的に沈下し形成された構造的盆地である。

この高山盆地の東中央部に旧高山城下町を形成し、地形の束縛を受けながら東西南北の街道を発展させたのである。



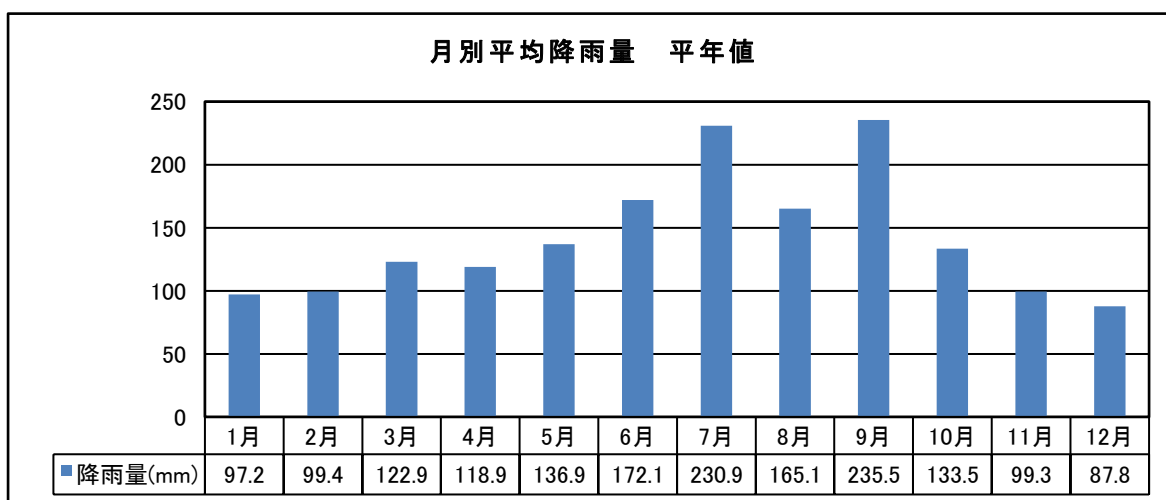
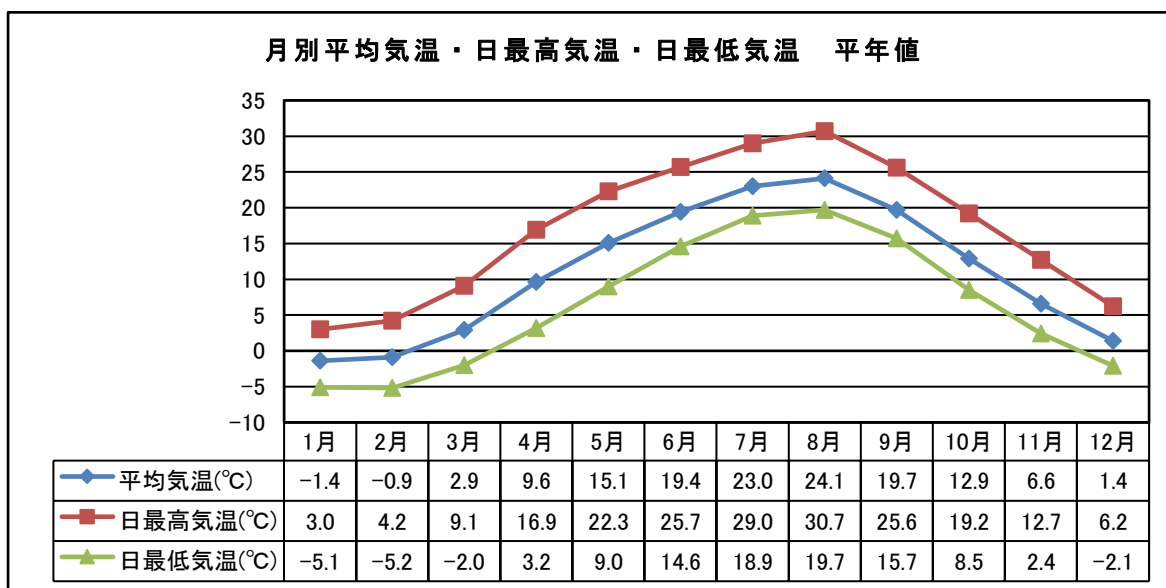
高山盆地の位置

### (3) 気象

高山市の気候は、海拔高度が高い所が多いため、東北地方北部や北海道南部と似て夏は涼しく、冬は雪が多く寒さが厳しい。全体的には内陸気候であり、特に高山地域は盆地のため内陸性が顕著に現れる。飛騨山脈をはじめ標高の高い地域は山岳気候となる。

気温は年平均で 11.0℃、8 月の最高気温平均は 30.7℃、2 月の最低気温平均はマイナス 5.2℃である。過去の最高気温の極値は平成 6 年(1994)8 月 8 日の 37.3℃、同じく最低気温の極値は昭和 14 年(1939)2 月 11 日のマイナス 25.5℃となっている。平年の観測日数は、最高気温 25℃以上の夏日 104.3 日、最低気温 0℃未満の冬日は 117.7 日で、最高気温 0℃未満の真冬日は 10.0 日に及ぶ。なお、最低気温 25℃以上の熱帯夜はこれまで記録されていない。風速は年平均 1.6m/s で、一年を通じて風の弱い地域である。降水量は年平均 1,699.5mm と、飛騨地方の中では比較的少ない。平年の年最深積雪は 54 cm であるが、積雪の最深は、昭和 56 年(1981)1 月 8 日の 128cm である。暖房を必要とする期間はかなり長く、飛騨山脈以西に位置する都市では有数の寒冷地といえる。

※気象の記録は、高山特別地域気象観測所(高山市桐生町)での値

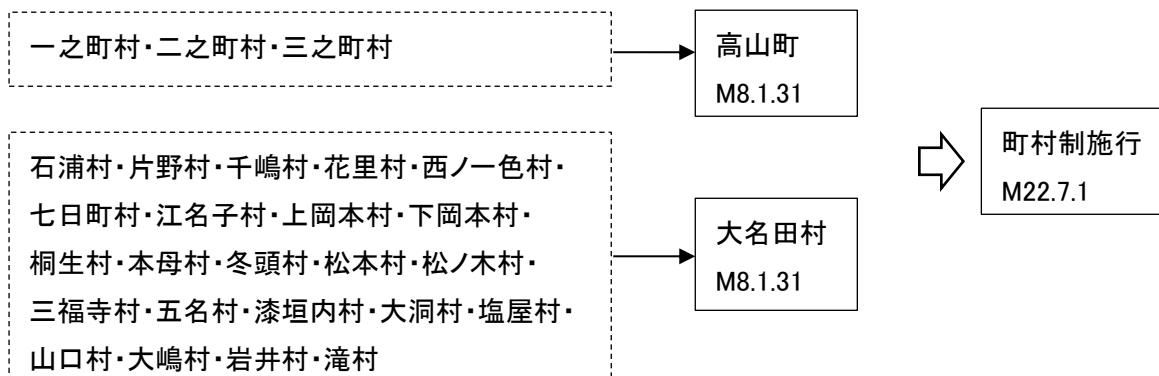


## 2. 社会的環境

### (1) 合併の沿革

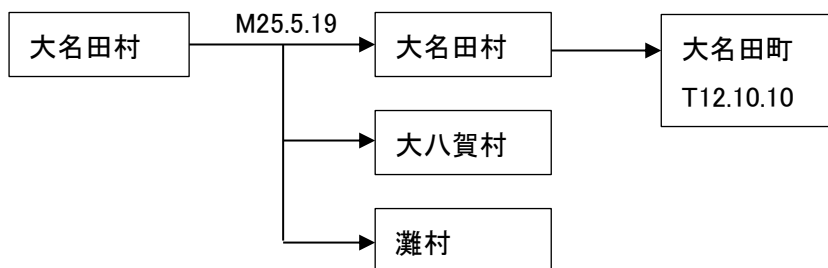
#### ①高山町、大名田村の誕生

明治8年(1875)に一之町村、二之町村、三之町村が合併して高山町となり、また、大野郡の23か村が合併して大名田村おおなだむらとなった。その後、明治22年(1889)に町村制が施行され、地方自治の権限を持った高山町と大名田村ができた。



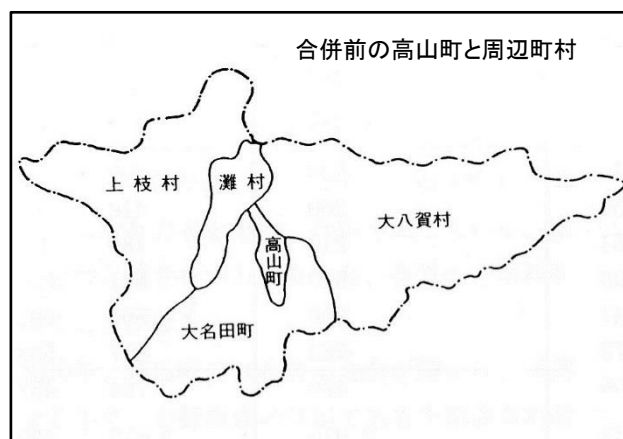
#### ②大名田村の分村

広大な村域をもっていた大名田村は、明治25年(1892)に「大名田村」、「大八賀村おおはちがむら」、「灘村なだむら」に分かれた。その後、大名田村は大正12年(1923)に町制を布いて大名田町になった。

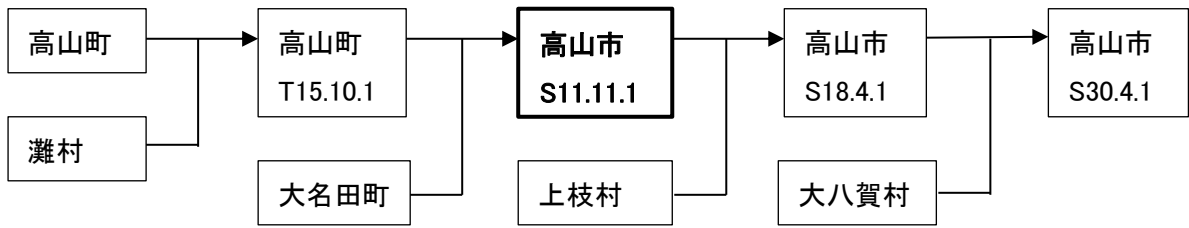


#### ③高山市の誕生

高山町は大正15年(1926)に灘村を編入、昭和11年(1936)11月1日には高山町と大名田町が合併して市制を施行、「高山市」として発足した。その後、昭和18年(1943)に上枝村ほずえむらを、昭和30年(1955)に大八賀村を編入した。

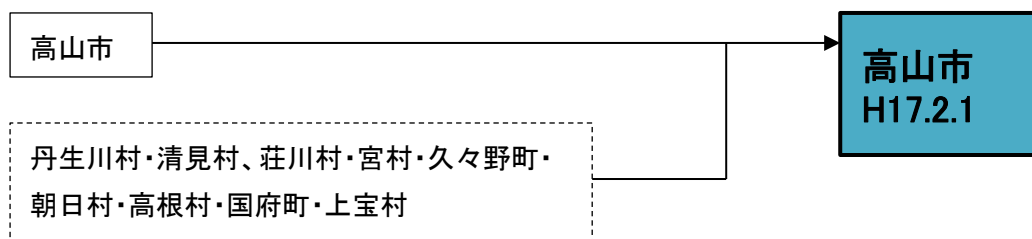






#### ④新たな高山市の誕生

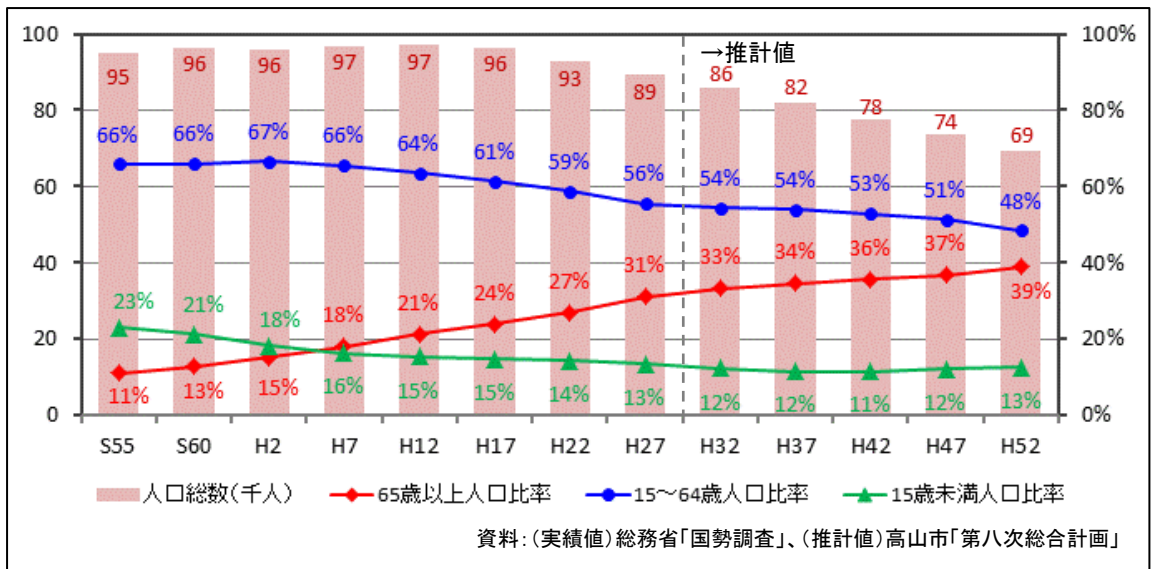
平成 17 年（2005）2 月 1 日、高山市は、丹生川村、清見村、荘川村、宮村、久々野町、朝日村、高根村、国府町、上宝村を編入し、日本一広大な面積を有する新しい高山市が誕生した。



#### (2) 人口動態

高山市における人口は、平成 12 年（2000）の約 9 万 7 千人をピークとして以降減少に転じ、平成 27 年（2015）の国勢調査では 89,182 人となり 9 万人を下回った。今後も毎年 8 百人程度減少し、令和 7 年（2025）には約 8 万 2 千人となり、令和 22 年（2040）には、平成 27 年時点と比較して 22.1%減少し、7 万人を割り込むと予測している。

また、令和 7 年（2025）の 65 歳以上の人口は、平成 22 年（2010）と比べ約 3 千 2 百人増加し、市民の 3 人に 1 人が高齢者となるのに対し、15 歳～64 歳の人口は約 1 万人減少、15 歳未満の人口は約 3 千 8 百人減少する見込みであり、全国よりも早いペースで人口減少・少子高齢化が進んでいる。

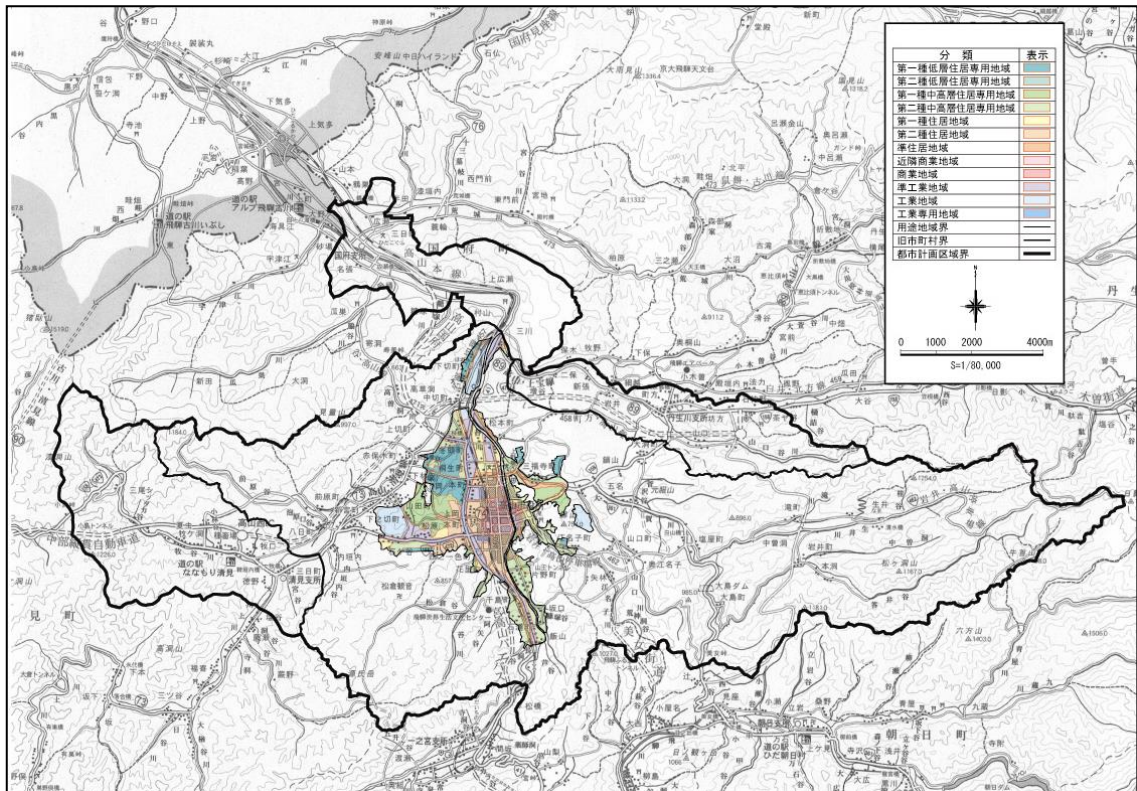


高山市の人口推移、将来推計

### (3) 土地利用

高山市の土地利用は、森林が91.7%を占め、農地が2.2%、道路が1.5%、宅地が1.1%、原野等が0.9%となっている(平成28年岐阜県統計書より)。経年的な傾向としては、宅地は横ばいとなっており、農用地は減少傾向となっている。

都市計画区域は、市内全域217,761haのうち約8.9%にあたる19,402haを指定しており、市中心部の約1,568haには用途地域を定めている。その構成は住居系66.7%、商業系6.8%、工業系26.5%となっている。



高山都市計画区域



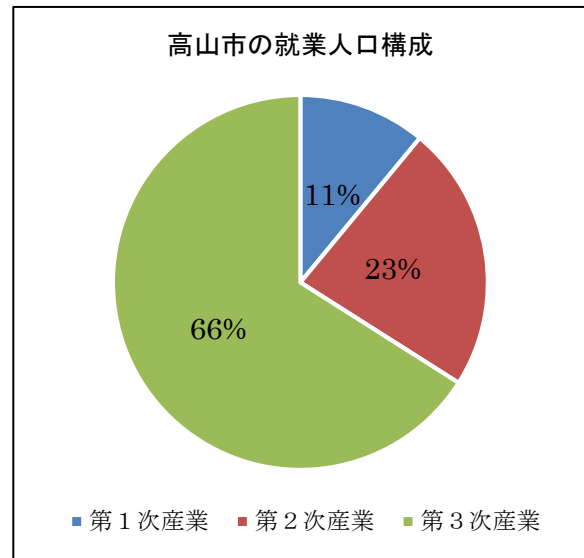
市役所周辺に広がる中心市街地



丹生川町に広がる田園地帯

#### (4) 産業

農業では、高冷地の冷涼な気象条件と肥よくな土壌を活かし、水稻をはじめホウレンソウやトマト、果樹、花き等を中心とした農業生産が行われている。特にホウレンソウは、市町村別の生産量が日本一である。販売農家のうち第1種及び第2種兼業農家が一貫して減り続け、離農や販売農家から自給的農家への移行が進行する一方で、専業農家数は増加傾向にあり、市が認定している認定農業者数は県内の約4分の1を占めている。



林業では、市域の約92%を森林が占めており、森林面積の約60%が民有林で、そのうち約38%が人工林となっている。間伐の対象となる11~45年生の面積は人工林全体の約56%に達しているが、木材価格の低迷などにより、間伐など森林の適正な整備が進んでいない。一方、環境意識の高まりから、地域産材を利用した住宅建築の需要が増えており、需要に応じた地域産材の供給体制も徐々に整ってきている。

畜産業では、その肉質の良さが評価され、近年全国的に「飛騨牛」ブランドが定着しつつある。畜産粗生産額のうち肉用牛が約62%を占めており、肉用牛のうち約4分の3が肥育牛販売、約4分の1が子牛販売となっている。飼養農家数及び飼養頭数は年々減少傾向にあるが、農家の規模拡大が進んでいる。

第2次産業では、「飛騨匠」<sup>ひだのたくみ</sup>の優れた木工加工技術を継承する建設業や木工関連産業をはじめ、長い歴史の中で培われ受け継がれた多彩な地場産業に支えられている。経済のグローバル化の進展に伴い、海外への販路拡大などが期待される一方、国内企業の生産拠点の海外移転による産業の空洞化による影響や、伝統的工芸品産業の担い手、原材料の不足などが懸念されている。第2次産業全体の市内総生産額は減少傾向にあり、全産業に占める割合も年々減少傾向にある。



第3次産業では、本市は周辺地域から多くの消費者を引き付けている飛騨地域の中核的な商業拠点となっている。観光客の増加や、景気の回復による個人消費の増加の期待が高まる一方、人口の減少、特に生産年齢人口の減少が続いていることに加え、豊富な品揃えを求めて市外で買い物をする人の増加や通信販売の普及などにより、市内の卸・小売業の商店経営は依然として厳しい状況にあり、第三次産業の市内総生産額、事業所数、従業者数はいずれも減少傾向にある。

市内産業全般として、都市部と比較して産業や職種が少ないことが若者の地元定着を妨げる大きな要因となっており、地域産業を支える人材の高齢化や後継者不足が深刻化している。

### 【高山市の主な工芸品】



#### ①飛騨の家具

飛騨の家具製造は、豊富な森林資源と飛騨匠の技という歴史的・文化的資源を背景に大正9年(1920)に始まった。長い歴史に根ざした高度な技術と時代を見据えたデザイン力を基礎に、全国の家具産地を牽引する製品を作り出している。

#### ②飛騨春慶（国指定伝統的工芸品）

約400年前、大工棟梁の高橋喜左衛門が献上した盆を、漆工の成田三右衛門が透漆で塗り上げたのが始まりと伝わる。良質の木材だけが持つ木肌の素朴な美しさと、透明感のある淡黄金色を放つ透漆塗りの技法が見事に融合した伝統工芸品である。

#### ③一位一刀彫（国指定伝統的工芸品）

江戸時代末期、松田亮長が飛騨の象徴であるイチイ材を根付彫刻に用い、彩色を施さない独自の技法を完成させたことが始まりとされる。良材選びに始まり、木取り等6つの工程を経て仕上げた作品は、年月と共に木肌や木目の色艶が増す。

#### ④渋草焼

天保12年(1841)、「渋草」という地名の土地に開窯。瀬戸や九谷から職人を招き、飛



驒九谷・飛驒赤絵と呼ばれる優れた作品を生み出した。その後一時衰退したが明治初期に再興。現在、磁器(芳国舎)と陶磁器(柳造窯)の二つの窯元がある。

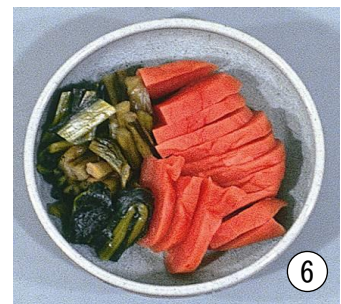
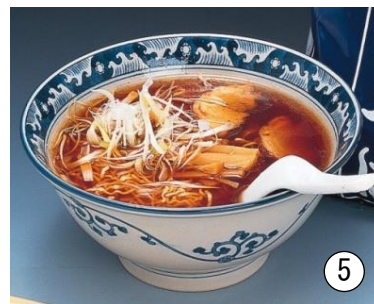
#### ⑤小糸焼

江戸寛永年間、飛驒三代目藩主・金森重頼公が、京から陶工を招き、「小糸坂」に窯を築いたのが始まり。小糸焼独自の渋いコバルトブルーの釉薬(青イラボ)が多方面で高く評価されている。

#### ⑥山田焼

江戸明和年間に開窯して、飛驒の人々に密着し雑器、建築用陶器、茶陶器を焼き続けてきた。茶系の色とどっしりした質感が特徴で、素朴のうちに優美な雅趣をもつ。

### 【高山市の主な特産品】



#### ①飛驒牛

丹精込めて育てられた飛驒牛は、肉質、味ともに絶品で、ステーキやしゃぶしゃぶ、すき焼きなど和食・洋食を問わず楽しむことができる。

#### ②地酒

高山では江戸中期から地酒がつくられてきた。清らかな水、良質の米、気候などの条件に恵まれた高山の地酒は、その深い味わいで全国の左党をうならせている。

#### ③朴葉みそ

朴葉の上に味噌、ねぎ、しいたけなどをのせ、焼きながら食べる郷土料理。

#### ④みたらしだんご

あっさりしたしょう油味で、焦げたしょう油の香ばしい香りが特徴。

#### ⑤高山ラーメン(中華そば)

しょうゆ味のスープに細く縮れた麺というシンプルな組み合わせが特徴。

#### ⑥漬物

飛驒独特の赤かぶなど、野菜や山菜の野生味を生かした素朴な風味と淡白な味。

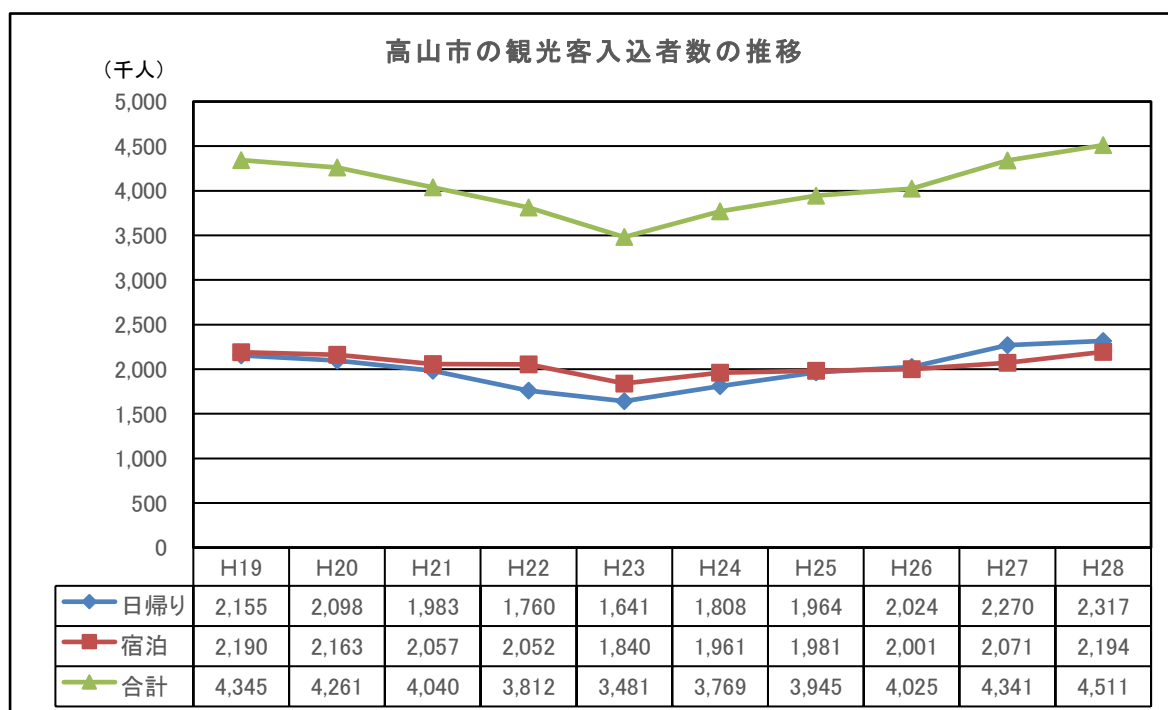
## (5) 観光

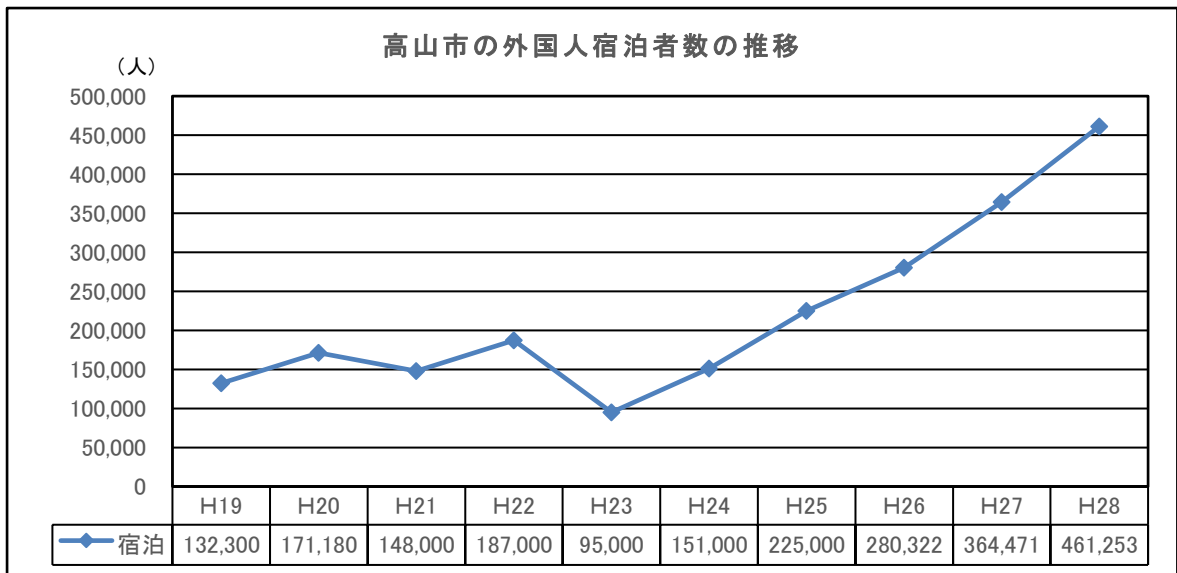
本市は、長い歴史と伝統に培われた豊富な歴史的・文化的資源や自然環境、農山村景観により、年間を通じて国内外の多くの観光客が訪れる観光地として広く認知されている。フランスのミシュラン・グリーン・ガイド・ジャポンで最高の三ツ星評価で紹介され、国内有数の国際観光都市としての高いブランド力を誇り、東海北陸自動車道の全線開通や北陸新幹線の整備促進による広域的な交通アクセス条件の向上によって、近年、観光客が大幅に増加している。

市町村合併後の年間の観光客入込者数は、平成 19 年(2007)の約 435 万人をピークに減少に転じ、東日本大震災の影響を受けた平成 23 年(2011)には、約 348 万人まで減少したが、平成 24 年(2012)以降は再び増加に転じ、平成 28 年(2016)には過去最高の約 451 万人を記録した。

また、国を挙げての国際観光振興に対する取り組みの強化や、本市のこれまでの官民一体となつての誘客・宣伝活動、市民や事業者による受け入れ体制の充実に加え、円安に伴う渡航費用の低減などにより、年間の外国人宿泊者数は、東日本大震災の影響を受けた平成 23 年(2011)を除いて、ほぼ一貫して増加傾向にあり、平成 28 年(2016)は過去最高となる 46 万 1 千人となっている。平成 28 年(2016)に本市を訪れた外国人宿泊者の約 6 割はアジア地域からの来訪者で、国・地域別では台湾(8 万 9 千人)が最も多く、次いで香港(約 5 万 8 千人)、タイ(約 3 万 5 千人)、中国(約 3 万 2 千人)の順となっている。

平成 28 年(2016)4 月に「飛騨匠の技・こころ」が日本遺産に認定されたことや、同年 12 月に高山祭の屋台行事がユネスコ無形文化遺産に登録されたことによる誘致活動の活発な取り組みも、観光客入込者数が増加した要因となっており、認定や登録を契機として、今後も様々な事業を展開することにより観光客の入込者数の増加が期待される。

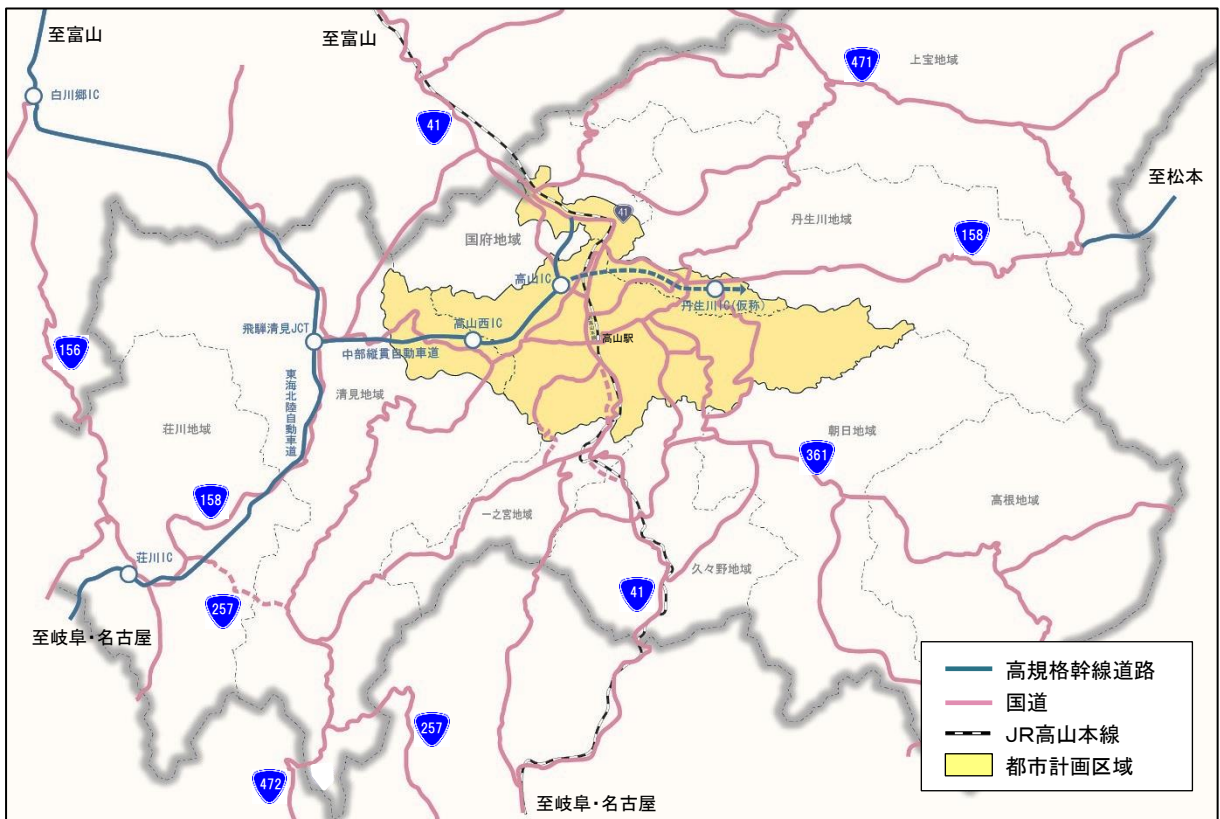




## (6) 交通

高速道路網として、東海北陸自動車道が市の西部を縦断しており、飛騨清見ジャンクションから中部縦貫自動車道により高山市街地までを結んでいる。また、富山方面と名古屋方面を結ぶ国道 41 号が市域中央を南北に縦断しているほか、国道 158 号が東西に横断しており、広域幹線道路網の主軸を構成している。

鉄道では、JR高山本線が国道 41 号と並走して南北に縦断しており、高山駅をはじめ 5 つの駅を有している。市内では路線バスをはじめ、コミュニティバス、デマンドタクシー等が運行されているほか、首都圏や周辺主要都市と結ぶ高速バスが運行されている。



高山市内の主要交通網図



### 3. 歴史的環境

#### (1) 旧石器・縄文～古墳時代

人々がまだ土器を作っていなかった旧石器時代、標高 1,200m の日和田高原池ノ原遺跡(高根町)では、円錐形細石刃核、北方系の舟底形細石刃核が出土している。

飛騨は広葉樹林帯の植生が広く分布し、縄文時代の遺跡が非常に多く存在する。1 万年前に使われた「有舌尖頭器」や、8 千年前の押型文土器が発見され、縄文時代の早い時期から文明が開かれていたことが想像される。片野町の糠塚遺跡から発掘された「浅鉢形土器」(6500 年前)は国の重要文化財に指定され、また、上野町の垣内遺跡からは 75 基の住居址(4000



糠塚遺跡浅鉢形土器出土状況

～3000 年前)と環状列石が発掘された。久々野町の国史跡「堂之上遺跡」は丘尾突端の好立地を特色としており、縄文時代前期～中期の住居址が多く発見されている。また、国府町の村山遺跡においては、関西系の北白川下層式土器と関東系の諸磯式土器の対比が注目されてきた。縄文時代前期からの関東系、関西系、北陸系、東海系が混在する飛騨の土器文化の様相は、現在も全国から注目される存在である。

飛騨の山地にはクリ、ドングリ、クルミ、トチの実、根茎類などの植物資源、イノシシ、クマ、シカなどの獲物が豊富で、豊かな自然の中で採取狩猟が繰り返されていた。縄文時代前期(約 6000 年前)の気温は今より 2～3 度高く、海も今より 2～3m 高くて現在の陸地にまで海岸線が及んでいた(縄文海進)ことを考えれば、縄文時代の高山は結構温かかったことになる。

飛騨の弥生時代の状況は不明な点が多い。しかし、稲作そのものの始まりが他地域より遅れたとは考えにくく、弥生時代から江戸時代まで集落が同じ位置で継続しており、弥生時代の遺跡の発見される機会が少ないためと思われる。弥生時代の遺跡は江名子ひじ山、赤保木遺跡、上切周辺の遺跡群等が知られている。

古墳時代の始まりもあまり解明されていない。古墳時代において、正史の中に初めて登場する飛騨の事件が両面宿禰の反乱である。「日本書紀」によれば、身体が 1 つで両面四手四足の怪物宿禰が朝廷の命令に従わず、仁徳天皇の 65 年、将軍・難波根子武振熊によって討伐されたと記されている。やがて、飛騨の豪族も中央政権に従うようになったということになっている。

現在、5 世紀に築かれた亀塚古墳(国府町広瀬町・滅失)、冬頭王塚古墳(冬頭町・現存)が飛騨では古い古墳とされ、亀塚からは甲冑、冬頭王塚からは大和朝廷からの下賜品と考えられる鉄剣・鏡が発掘されている。また、平成 4 年(1992)には県指定史跡「赤保

木古墳群」の中の 5 号古墳が発掘され、内部に赤色物塗彩された竪穴式石室を確認した。冬頭王塚古墳の時期と同じ 5 世紀中頃と推定され、更に古い古墳の発見が今後もありうることを示している。

古墳時代後期は、横穴式石室が導入された時期で、三福寺町の小丸山古墳、西之一色町の岩屋古墳、上切町の寺尾古墳群などが造られている。



冬頭王塚古墳内部石室

古墳の数は、滅失も含めて「岐阜県遺跡台帳」、「国府町遺跡台帳」によると飛騨全体で 521 基、高山市の高山地域は 80 基、国府町は 339 基で圧倒的に国府町が多い。この内、残存する古墳は高山 51 基、国府 332 基である。国府町に存在する主な古墳は、岐阜県下最大の石室をもつ、こう峠口古墳(7 世紀)、こうと洞古墳、広瀬古墳、海具江古墳など注目すべき古墳がある。古墳時代における高山、国府・古川盆地の隆盛が古墳の数によって伺われる。

古墳時代終末期になると山頂に近い山腹に横穴が掘られるようになり、三福寺町や冬頭町に発見されている。昭和 63 年(1988)、滅失はしたが、三福寺町桧山古墳から 50 体近い人骨が発見された。横穴で現存するのは、斐太高校の裏山にある杉ヶ洞横穴のみで、これらの横穴の被葬者は、朝廷によって送り込まれた氏族集団の墓と推定される。

## (2) 飛鳥・白鳳～平安時代

高山地域には、確かなところで三仏寺廃寺、東光寺跡の 2 寺の白鳳寺院があるが、国府・古川盆地には石橋廃寺、光寿庵廃寺、寿楽寺、杉崎廃寺など 9 カ寺と多い。しかし奈良時代創建の寺院は国分寺・国分尼寺(辻ヶ森三社境内)の 2 寺が高山地域にあるだけである。このことから、古墳から白鳳時代にかけては、政治の中心地が国府・古川盆地にあったと思われ、奈良時代になってから東西南北交通の便が良い高山に国府が置かれ、官寺である国分寺と国分尼寺が造営されたと考えられている。



国分尼寺金堂跡

美濃・飛騨の寺院にかかわる最古の記録は「日本書紀」に出てくる。「朱鳥元年(686)、大津皇子の謀反に加わった新羅の僧行心こうじんが、その学識を惜しまれて飛騨の伽藍へ流された」という記載であるが、この「飛騨の伽藍」が高山、国府・古川盆地のいずれかにあった。このころ、すでに都で知られるほどの古代寺院が飛騨に建っていたことに注目される。

律令制下では、飛驒は山国であり、納める米や織物がないたため、大宝令(701年制定)では飛驒の調・庸(絹、布、糸などを納めるもので、主に成年男子に課せられた)を免じ、50戸ごとに<sup>しょうてい</sup>匠丁(木挽や大工)8人、<sup>しちよう</sup>廩丁(炊事係)を2人、計10人を都へ差し出すこと、毎年交代して勤務し、里に残ったものが匠丁の食料を運ぶということを決めている。この<sup>ひだのたくみ</sup>飛驒工制度では毎年約100人が徴用され、1年に330日(後に250日)以上350日以下の労務を強いられ、厳しい労働に耐えかねて逃亡する者も多かった。平安初期の太政官は「飛驒人の言語容顔は他国と異なり、すぐわかるはずなので、早速捕えて差し出せ」と諸国に命じたこともある。平城宮、東大寺、平安宮の豊楽院や大極殿などの造営に貢献し、名工も生まれた。その技と心は、現代も高山の伝統工芸や木工産業などに受け継がれている。

保延、永治(1135～1141)の頃には<sup>たいらのとぎのすけ あ そん</sup>平時輔朝臣が飛驒の守として三仏寺城(三福寺町歎喜寺の裏山)に在城していた。3代目<sup>かげのり</sup>景則の頃から飛驒は平家の領国となった。4代目<sup>かげいえ</sup>景家は4人の子息とともに平家の臣として京に上っていたが、治承5年(1181)木曾義仲の軍に攻められた。留守を預かる景家の室・阿紀伊の方と、二子<sup>かげつな</sup>景綱の息女・鶴の前は臣下とともに戦ったが石光山(片野町)で破れ、三仏寺城に籠城したものの城は落ちた。義仲勢は大軍事行動を起こすにあたり、飛驒の良馬を求めて攻め入ったといわれる。

### (3) 鎌倉～戦国時代

鎌倉時代は、政治の中心地が国府町の広瀬郷、荒城郷の方へ移ったと考えられる。飛驒には<sup>おおのよし</sup>多好方、<sup>よしとき</sup>好節父子が飛驒の地頭<sup>ぶにん</sup>に補任されたことが「吾妻鏡」に出てくる。この多氏は元々都の<sup>れいじん</sup>伶人(楽人)で、源頼朝や北条氏に仕えた一流の舞楽演奏家であった。飛驒各地の祭礼に舞われる<sup>とうけいらく</sup>鬮鶏楽、<sup>とりげうち</sup>鳥毛打は多好方らが教えたものとの説がある。

室町時代初期の飛驒は、守護の京極氏が南飛驒・益田に、<sup>あねがこうじ</sup>国司の姉小路氏が北飛驒に勢力を競っていた。当時、国司と守護は併置の方針があり、守護は一国の行政政務官として軍事指揮権をもち、次第に領国支配を進め国司の権限を侵略したのである。

京極氏は近江の守護・佐々木信綱の四男、氏信を祖とする。京都の京極高辻に館を構えていたので「京極」と号し、代々幕府から守護に補任された。

姉小路氏は、建武の中興(1334)に姉小路家綱が南朝方の飛驒国司に任ぜられたといわれる。その弟の<sup>まさつな</sup>尹綱は飛驒を任されていたが、応永18年(1411)、足利義持(室町幕府第4代将軍)の命を受けた京極高光、高数らによって討たれた。

その結果、姉小路氏は小島城にいた小島氏を嫡流とし、向小島城の小鷹利氏と、古河城の古河氏の三家に分裂し、飛驒の最南端には京極氏の被官<sup>みつぎ</sup>・三木氏が置かれた。この応永の乱後、飛驒は神岡町周辺の江馬氏、古川盆地に姉小路三家、大野・益田に京極氏と三氏が<sup>ていりつ</sup>鼎立したのである。

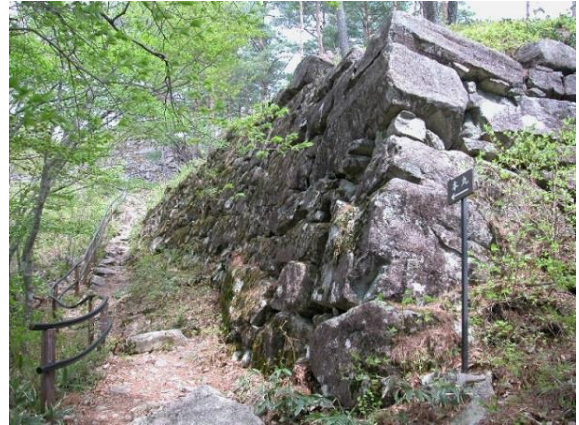
中央では応仁の乱で戦乱が広がる中、飛驒では「文明飛驒の乱」(金森史)が起きて、姉小路勢と京極勢が一進一退の戦いをしていた。後、京極側では<sup>たが</sup>多賀氏、<sup>たかやまげき</sup>高山外記など



が守護代として勢力を伸ばし、天神山(現在の城山)に城を築いた。また、広瀬郷には広瀬氏、白川郷には内ヶ嶋氏、高山の中山に岡本豊前守<sup>ぶぜんのかみ</sup>、三枝郷に山田紀伊守<sup>さいぐさ</sup>、江名子に畑六郎左衛門、大八賀郷に鍋山豊後守<sup>ぶんごのかみ</sup>などが割拠していた。これら飛騨の豪族は隣国の上杉氏、武田氏に強く影響されていたが、両氏の衰退とともに力を失うことになる。

そこで台頭してくるのが桜洞城(現在の下呂市萩原町)の三木自綱<sup>みつきよりつな</sup>で、永禄元年(1558)、広瀬氏と結んで高山外記、山田紀伊守を滅ぼした。

そして、天正10年(1582)、三木氏は飛騨分け目の合戦といわれる国府町八日町の戦いで江馬輝盛<sup>てるもり</sup>に勝ち、ほぼ飛騨を制覇したのである。三木氏は、自ら絶家となった「姉小路」の姓を名乗り、松倉城を築城している。



松倉城跡

#### (4) 金森統治時代

豊臣秀吉は、天正13年(1585)7月に越中の佐々成政<sup>さっさなりまさ</sup>を攻めた。その際、越前大野城主であった金森長近<sup>かなもりながちか</sup>は、飛騨の三木氏攻略を命じられた。長近は部隊を二手に分け、養子可重<sup>ありしげ</sup>は南から桜洞城、鍋山城を、長近軍は牧戸、小鷹利、小島の各城を攻め、同年8月には三木氏の松倉城を攻め落として飛騨を平定したのである。しかし、金森進攻の先導役を務めた在地武将の反乱、一揆が1年間続いた。そして天正14年(1586)8月7日、長近は飛騨国3万8千石の国主として入府した。また、関ヶ原の戦いでは徳川方について前線で戦い、美濃国上有知<sup>こうずち</sup>(美濃市)1万8千石、河内国金田(大阪府堺市)3千石を加増した。

入国した長近は、当初、鍋山城(漆垣内町)に城下をかまえたが、土地条件から天神山古城に城を築くことにした。城の建設は天正16年(1588)から始め、慶長5年(1600)までの13年間で本丸、二之丸を完成させ、以後3年かけて三之丸が築かれた。日本国中に五つとない見事な城だと記録が残っている。

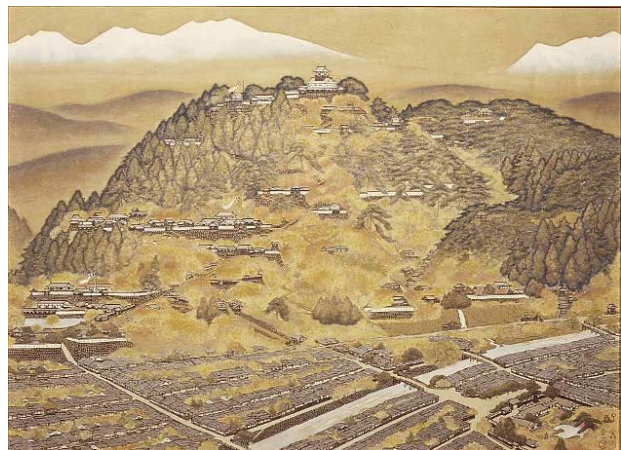


高山城復元図

また、城と同時に城下町の工事も行われている。城を取り囲むように高台を武家地とし、一段低いところ(三町)を町人の町とし、京都になぞらえて東山に寺院群を設けた。農民一揆の対策としては、門徒の多い照蓮寺(現在の高山別院)を高山城と向かい合わせに配置して人の心を安め、寺社の再興や宗和流茶道をはじめ、様々な文化をおこすことも積極的に行ったのである。

重要施策としては商業振興、鉱山資源の開発、山林資源の開発がある。山林資源が豊富であったため、関ヶ原の合戦時には、表石高の倍近くになる 6 万石余並の軍役が負担できたともいわれ、4 代頼直は江戸の大火の際に桧の角材千本を献上している。

高山における金森氏は 6 代 107 年間続き、京文化及び江戸文化を受け入れて、今日の高山の基盤が形成されたが、元禄 5 年(1692)7 月 28 日、頼皆の時代に突然出羽国上ノ山(山形県)に転封となつて金森氏による政治は終わったのである。上ノ山では、そこにいた「土岐氏」が移封され、上ノ山城の破却が進行中であつた。



城下町高山の推定鳥瞰図(現代作画)

頼皆は上ノ山で 5 年間山林調査に力を入れていたが、元禄 10 年(1697)、今度は美濃国郡上藩に転封となる。頼皆は江戸芝の屋敷で亡くなり、孫の頼錦が後を継ぎ、幕府の奏者役を命ぜられた。そのため、多くの費用を必要としたこともあり、年貢を定免法から検見取りに改めたため 4 年半にわたる「宝暦郡上騒動」が起こっている。これで金森の本家はとりつぶされてしまったが、分家の旗本左京家は別扱いの知行として 3 千石のまま越前に領地替えになり、現在も現地に子孫が在住している。

## (5) 金森六代

### ①初代高山国主 金森長近 大永 4 年(1524)～慶長 13 年(1608)

大永 4 年(1524)源姓の土岐氏一族として誕生、初名は可近。18 歳より織田信長に仕え、戦功により信長の一字を賜り、長近と改名した。信長没後、秀吉に仕えた。天正 13 年(1585)、秀吉より三木自綱討伐の命を受け飛騨を平定、翌年、飛騨 3 万 8 千石余を与えられた。慶長 11 年(1606)、関ヶ原の戦いで加増された美濃国上有知小倉山に小倉山城を築き自らの居城とし、高山城を養子可重に託した。武将として活躍したのみでなく、治水、街道



金森長近

の整備、林政など産業の開発振興に尽くした。また、古田織部、千利休の門下となり茶人としても名を馳せ、風流人でもあつた。慶長 13 年(1608)、85 歳で京都にて死去。

### ②第 2 代 金森可重 永禄元年(1558)～元和元年(1615)

美濃の長屋・将監景重の子として永禄元年(1558)に誕生した。幼名は喜三丸、幼少より長近に養われ、後に養子となった。天正 13 年(1585)の三木攻略では長近の副将として



戦い、勝利をおさめた。長近同様、信長、秀吉、家康に仕え、戦場で数々の功績をあげ、関ヶ原の戦いでは父長近とともに奮戦した。慶長 13 年(1608)長近の死により家督をつぎ、飛騨国を治めることになり、同 19 年(1614)、元和元年(1615)の大阪の役で多くの敵の首をとった。治政においても義父の志をつぎ、桜山八幡宮を再興するなど、高山の城下町発展に力を注いだ。また、茶道においては千利休の子道安に師事し、戦陣の中でも茶をたしなむという一流の武家茶人で、徳川 2 代将軍秀忠の茶道師南役も努めている。元和元年(1615)、58 歳で伏見にて死去。



金森可重

### ③第3代 金森重頼しげより 慶長元年(1596)～慶安3年(1650)

可重の3男として慶長元年(1596)誕生。幼少の頃から駿府の徳川家康の近辺に従事。同 19 年(1614)大阪冬の陣に父とともに従軍し、本陣で家康の側近として仕えた。元和元年(1615)、夏の陣にも父とともに従軍した。父の死去に伴い、家康の命により家督を継ぎ、城主となっている。将軍家の信も厚く、元和年間には家康 6 男の越後高田城主・松平忠輝が罪を受けた時、忠輝を預かるということもあった。寛永 9 年(1632)、東山に宗猷寺を創建。さらに飛騨天満宮の再興や東照宮などを建立した。重頼は、新田開墾や鉾山発掘に力を注ぐほか、高山の窯業の基となるべく小糸坂に陶窯を築き、



金森重頼

焼出させている。寛永 18 年(1641)の飢饉の際には、家宝の名茶器「雲山肩衝うんざんかたつき」を譲り、その代金を米に換えて国中の人々を救済したという善政ぶりは有名である。風流を好む重頼は、茶道ばかりか和歌も嗜んだといわれている。慶安 3 年(1650)、55 歳で病にて死去。

### ④第4代 金森頼直よりなお 元和5年(1619)～寛文5年(1665)

元和 5 年(1619)重頼の長男として誕生、慶安 3 年(1650)父重頼の死により家督を相続した。信仰心がたいへん篤く、承応 2 年(1653)大隆寺を建立、万治 2 年(1659)久津八幡宮を修復、同 3 年(1660)には古川杉本社殿(気多若宮神社)と千光寺を再興した。また、明暦 3 年(1657)の江戸大火の際、頼直を救った駿馬「山桜」の死後、頭骨を祀った。この大火の際、頼直は幕府に桧の角材千本を献上している。寛文 3 年(1663)、病のため剃髪して仏門に入り、自



金森頼直



らは立軒素白りっけんそはくと名乗った。病氣平癒のため、越中の肴屋が日枝神社に奉納した絵馬が今も遺っている。同 5 年(1665)、47 歳で江戸邸にて死去。

#### ⑤第 5 代 金森頼業よりなり 慶安元年(1648)～寛文 11 年(1671)

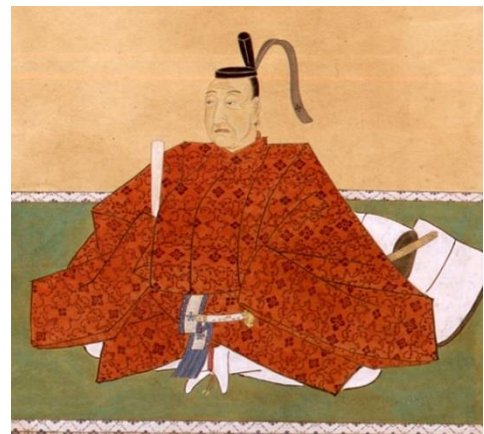
慶安元年(1648)頼直の長男として誕生し、寛文 5 年(1665)父の遺領飛騨一円を賜わった。頼業は風流を好み、家臣木村昌悦しやうえつ・日根野宣潔ひねののぶきよらとよく連歌を親しみ、高山に文芸が根づく基をつくったという。寛文 8 年(1668)、鉾山師・茂住宗貞の下代・宮島平左衛門を高山城中で殺害、これを聞いた宗貞は逃亡し、以後飛騨の鉾山は衰退してしまった。寛文 11 年(1671)、江戸邸にて 24 歳の若さで病のため死去。



金森頼業

#### ⑥第 6 代 金森頼峯よりとき 寛文 9 年(1669)～元文 5 年(1740)

寛文 9 年(1669)頼業の長男として誕生、幼名は万之助または万助といった。父の死により同 12 年(1672)、わずか 4 歳で家督を継ぎ、叔父の左京近供が後見役として実務を取り仕切った。天和 3 年(1683)頼時と改名、のち頼峯となった。貞享 4 年(1687)頼峯の大酒、不作法を諫めるため家士田島藤五郎が自害するという事件も起きている。元禄 2 年(1689)4 月、徳川 5 代将軍綱吉の奥詰衆を、同年 5 月側用人を命ぜられたが、綱吉の意にかなわず翌 3 年 4 月免職、翌 4 年 6 月には屋敷替を命ぜられた。そして元禄 5 年(1692)7 月 28 日、出羽国上ノ山へ移封を命ぜられ、ここに金森氏 6 代による飛騨統治は終りを告げた。その後、頼峯は、同 10 年(1697)美濃国郡上郡へ再転封となった。郡上藩主を 43 年務め、元文 5 年(1740)、68 歳で死去。



金森頼峯

### (6) 幕府直轄地時代

金森氏転封後の飛騨は幕府直轄地となり、代官には関東郡代・伊奈半十郎忠篤ただあつが兼任、金沢藩主・前田綱紀つなのりが高山城在番を命ぜられた。金沢藩は 4～5 百人の藩士を半年交替で駐留させ、「飛州高山在番諸法度」を設けて高山城建物を管理している。

元禄 8 年(1695)1 月 12 日、金沢藩の高山城取壊し願いが聞き届けられ、幕府から高山城破却の命令が出された。同年 4 月 22 日から取壊しを開始、6 月 18 日には全てを終えて帰藩した。取壊しは、地元の者も金沢藩に加わってためらいなく行われ、建築材や庭木が我先に運び出されたと「願生寺由来記」に記載されている。

代官所は金森氏の向屋敷に置かれ、徳川幕府直轄の天領として高山陣屋において 25 代、177 年にわたり幕政が行われた。11 代までが代官、12 代大原彦四郎から郡代に昇格をしている。この時代から宮川以東の旧高山城下町全域が町人町となり、江戸文化の影響を強く受けるとともに、高山祭が盛んとなり、屋台が造られ、市が行われるなど、社会的、文化的な基盤が確立された。



高山陣屋跡

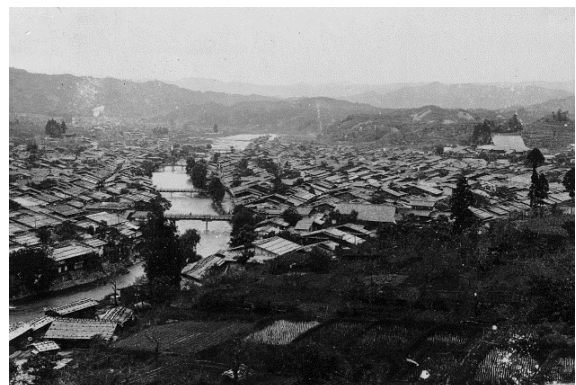
明和 8 年(1771)、大原代官は幕府の命令で飛州全山に官材の元伐を中止、安永 2 年(1773)には飛騨の村々の代表を集め、検地のやり直しを言い渡した。飛騨の農民たちは田を少ししかもっておらず、厳しい年貢が更に厳しくなると越訴、駕籠訴などをして検地中止を願い出た。ここに明和 8 年(1771)から寛政元年(1789)まで、大原父子 2 代、18 年間にわたる農民一揆が起きたのである。その中に主な事件が 3 つ含まれていて、明和、安永、天明騒動と呼ばれている。明和・安永騒動では 9 千人余の農民が罰せられ、大原彦四郎代官は飛騨を 5 万 5 千石に増石した功績により郡代に昇格した。しかし、天明騒動では大原亀五郎郡代の政治不正が問われて、郡代は八丈島へ流罪、農民側の罪は軽く済んだ。

善政をつくした代官・郡代もいる。7 代長谷川忠崇は「飛州志」を著わしている。8 代幸田善太夫は飢饉のために馬鈴薯(ジャガイモ)を農民に作らせ、「善太夫いも」、「せんだいも」と今も呼ばれる。19 代大井帯刀は天保飢饉の際に、飛騨はもちろん出張陣屋(越前本保陣屋)領内でも救済措置を講じた。20 代豊田藤之進は洪草焼を起こし、また蚕業を盛んにした。

## (7) 明治～大正時代

慶応 4 年(1868)、飛騨国最後の郡代新見内膳が江戸へ逃げ、幕府直轄時代はあつげなく終わった。同年 2 月 7 日には竹沢寛三郎が高山陣屋へ入り、続いて 3 月 3 日には梅村速水と交替して、5 月 23 日飛騨県(翌月高山県と改称)ができた。高山県知事となった梅村は熱意と新しい計画で政治改革をしたが、古いしきたりに慣れ親しんだ飛騨の人には受け入れられず、明治 2 年(1869)梅村騒動が起きてしまう。

明治 4 年(1871)、府県廃合により高山県を廃し、飛騨は筑摩県の一部となる。同 9 年(1876)には筑摩県が廃止され、飛騨の三郡は岐阜県に合併された。



大正時代の高山市街地



高山陣屋は、飛騨県、高山県の庁舎となり、後、筑摩県支庁、岐阜県高山支庁となって国からの役人が駐在している。明治 12 年(1879)からは飛騨三郡の郡庁舎、明治 30 年(1897)からは大野郡役所、郡制廃止後の大正 15 年(1926)からは岐阜県飛騨支庁として利用された。

明治 9 年(1876)には、飛騨地域で初めての洋風建築である煥章学校が完成した。

明治 22 年(1889)には町村制が施行され、地方自治の権限を持った高山町ができ、高山町役場が開場した。明治 28 年(1895)には高山町役場が新築され落成している。明治前半は議会制民主主義を取り入れた地方自治が発展した時期である。また、近代産業の育成は、富国強兵に必要であったため内務省が力を入れた。高山では開産社、永昌社、三星製糸などの製糸業が殖産興業として全盛時代を迎える。明治 37 年(1904)には高山で初めて電灯がつき、大正元年(1912)には電話交換業務が開始している。



三星製糸

国鉄高山線の建設促進運動は明治から始まり、大正 6 年(1917)には「飛騨鉄道速成同盟会」が組織された。大正 9 年(1920)には、高山線の第一歩である岐阜―各務原間が開通をした。

## (8) 昭和時代

昭和 9 年(1934)10 月 25 日、高山線が全線開通し高山駅が開業した。鉄道の開通は飛騨の開発に大きく貢献するはずだったが、やがて戦争に突入し、飛騨の近代化は戦後を待たなければならなかった。



昭和 10 年代の国分寺通り

昭和 11 年(1936)11 月 1 日、高山町と大名田町が合併して市制が施行され高山市が誕生した。11 月 3 日から 5 日間、様々な祝賀行事が開催された。翌年には日中戦争が始まり、国民は総動員されていく。昭和 16 年(1941)には城山公園にあった 2 門の大砲が、翌年には市内各寺院の梵鐘が供出された。また、昭和 19 年(1944)には高山航空工業会社が設立され、木製の航空機部品が製造された。昭和 20 年(1945)8 月 2 日、高山に爆撃予告のビラがまかれたが、15 日に終戦を迎えたことで爆撃をまぬがれた。なお、戦中の昭和 18 年(1943)には、上枝村と合併している。



戦後は、昭和 22 年(1947)から始まった農地改革により経済界の再編成が行われ、昭和 25 年(1950)からは上水道工事に着工。昭和 30 年(1955)に大八賀村と合併し、財政再建団体からの脱出、衛生センターの建設と近代化を進めた。

また、昭和 23 年(1948)には天井に窓がついたロマンスカーによる乗鞍登山バスの試運転を開始し、戦後 3 年目にして早々と山岳観光に着手したほか、昭和 25 年(1950)には城山公園と乗鞍岳一帯を会場とした高山パラダイスと乗鞍まつりが開催され、高山や乗鞍の PR が行われた。昭和 30 年(1955)には飛騨の祭りで初めて山王祭(春の高山祭)がNHK



乗鞍登山バス

Kにより全国にテレビ放送され、昭和 35 年(1960)には高山祭屋台が、国の重要民俗資料(現在は重要有形民俗文化財)に指定。昭和 38 年(1963)、「くらしの手帖」に“山のむこうの町”として高山が紹介されると、高山の市街地に訪れる観光客も徐々に増えていったが、宿泊客は温泉地である下呂や平湯が多い状況が続いた。

昭和 30 年代後半には、子ども会による清掃活動や宮川への稚魚の放流式を皮切りに、昭和 40 年(1965)の岐阜国体に向けて町を美しくする運動が繰り広げられた。高度経済成長期にあって、町並み保存、川を美しくする運動はこの頃から始まったのである。

昭和 40 年代になると高山祭屋台会館や飛騨民俗村飛騨の里の開館、乗鞍スカイラインの開通など観光客の受入体制が整い、入込数が飛躍的に伸びていった。昭和 51 年(1976)には年間観光客入込者数が初めて 200 万人の大台を突破した。また、昭和 54 年(1979)には三町地区が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。



飛騨民俗村 飛騨の里

昭和 50~60 年代は観光イベントが数多く開催され、昭和 63 年(1988)7 月にはぎふ中部未来博覧会が、同年 9~10 月には飛騨・高山博が開幕している。

## (9) 平成時代

平成に入ると、中部縦貫自動車道安房峠道路の開通、東海北陸自動車道荘川IC・飛騨清見ICの開通、中部縦貫自動車道高山西IC・高山ICの開通など、広域的な道路網の整備が進み、高山への交通アクセスが大幅に向上した。平成 8 年(1996)には高山市役所の新庁舎が完成。平成 14 年(2002)には、全国和牛能力共進会が高山を会場に開催され、飛騨牛が日本一を獲得したほか、平成 16 年(2004)には下二之町大新町が国の重要伝

統的建造物群保存地区に選定されている。

合併特例法の改正に伴い市町村合併が強力に推進され、平成 17 年(2005)2 月 1 日には、丹生川村、清見村、荘川村、宮村、久々野町、朝日村、高根村、国府町、上宝村と合併して新しい高山市が誕生した。その時、人口 97,533 人、世帯数 33,937、面積 2,177.67 km<sup>2</sup>、森林率は 92.5%であった。

合併により日本一面積の大きい自治体となるとともに、高山市は飛騨山脈(北アルプス)や奥飛騨温泉郷をはじめとする自然資源や観光資源、各地域の祭礼行事や伝統文化等の歴史資源など、数多くの、そしてバラエティーに富んだ魅力を有することとなった。また、官民一体となつての積極的な海外への誘客・宣伝活動により、国内有数の国際観光都市として確固たるブランド力を獲得することに成功し、平成 21 年(2009)にはフランスのミシュラン・グリーンガイド・ジャポンに「飛騨高山」が三ツ星評価で紹介された。平成 23 年(2011)には飛騨高山まちの博物館が開館し、高山の歴史的風致を紹介する拠点施設として外国人を含む多くの観光客等に利用されている。

平成 28 年(2016)4 月には「飛騨匠の技・こころ」が日本遺産に認定、同年 12 月には「山・鉾・屋台行事」の一つとして「高山祭の屋台行事」がユネスコ無形文化遺産に登録されるという歴史的な出来事があり、この年の観光客入込者数は過去最高の 451 万 1 千人を記録した。これらのことを契機として、今後ますますの観光客の増加が期待される。



乗鞍山麓五色ヶ原の森(丹生川町)



飛騨生きびなまつり(一之宮町)



秋神温泉氷まつり(朝日町)



奥飛騨温泉郷(上宝町)



## (10) 輩出した主な人物

高山は金森時代から国主や国家老らが学問に力を入れ、文人墨客が多く城下町を訪れた。幕府直轄地になってもその流れは継続し、代官(後に郡代)はもちろん、配下の元締、手附、手代らも漢学、国学、詩歌などを武士のたしなみとし、地役人や町人、僧と共に学問塾で学んでいる。その伝統は今も継続し、俳諧、詩歌などが盛んに行われている。

### ①金森宗和 <sup>そうわ</sup> 天正 12 年(1584)～明暦 2 年(1656)

宗和流茶道の祖。金森 2 代可重の長男として生まれ、最初は重近と称した。古川町の増島城主となるが、父から勘当され、母と共に京都へ行く。大徳寺の禅に学び、剃髪して宗和と号した。千道安に茶を学んだ父から茶道を学び、京都で公家衆との交流の中で茶道を極め、宗和流を起こす。飛騨春慶の成立にも寄与したほか、仁清の作陶の指導、「宗和好み」と呼ばれる茶器や庭等、当時の文化に大きな足跡を残した。高山では今でも「宗和流本膳」など、宗和の心が引き継がれている。



金森宗和

### ②加藤歩齋 <sup>ほしやう</sup> 寛保 3 年(1743)～文政 10 年(1827)

現在の高山市上二之町に生まれた俳人で、幼いころから学問を好み、6 歳から父の塾で学問を始めた。五升庵蝶夢ごしょうあんちやうむに俳諧を、伴蒿蹊ばんこうけいに国学を学び修めるほか、京都で經典、仏籍を学び、谷文晁ぶんちやうと交友を深め書画を学んだ。父が隠居すると塾を継ぎ、田中大秀おおひで、赤田臥牛がぎゆうら多くの俳人・学者を輩出。また、安永 4 年(1775)に図書 1 千余冊を収集して飛騨地域初の公開文庫である「雲橋社」を創設し、文教の振興に力を尽くした。「紙魚のやとり」、「ゆききのたびつと」、「わしのふる巢」など著書も多い。昭和 3 年(1928)に従五位を追贈される。

### ③赤田臥牛 <sup>がぎゆう</sup> 延享 4 年(1747)～文政 5 年(1822)

現在の高山市上一之町に生まれた儒学者で、優れた才能により飛騨に漢学を広めた。生家は酒造を主な生業にしていたが、臥牛は幼少より学問を志し、勝久寺の瑞雲雪峰すい云に論孟ろんもうと五経ごきやうの句読を受ける。津野滄洲そうしゆうは臥牛の才能を惜しみ尾張の松平君山くんざん、浅井と南なん、江戸の宇野明霞めいか、館柳湾たちりゆうわんなどに紹介。これらに師事した臥牛は飛騨において漢学者としての不動の地位を築く。文化 2 年(1805)、高山の町人たちが、臥牛に学童教育と五常の道について教えを請おうと、その教授所を開設することを飛騨郡代に願い出た。郡代はこれを許可し、臥牛の自邸に講堂を新築し、半官半私の学塾「清修館」(飛騨地方で初の学問所)を開設した。著書「臥牛集初編」。



④<sup>おおひで</sup>田中大秀 安永 5 年(1777)～弘化 4 年(1847)

現在の高山市上一之町に薬種商の三男として生まれる。幼少より読書詠歌を好み熱田神宮神官の栗田知周や歌人の伴蒿<sup>ばんこうけい</sup>に学ぶ。23 歳の時に上京し、25 歳の時に伊勢神宮に参拝したのを機に本居宣長に入門を願い、そこで国学の指導を受けた。宣長没後は本居大平を訪ね国典を研究。飛騨に初めて国学を伝え、多くの門人を擁した。記録では、大秀の門人には伊予(現在の愛媛県)から出羽(現在の秋田県)まで、260 余名がいたと言われている。敬神尊皇の念が篤く、文政元年(1818)に荏名神社、



田中大秀

同 4 年(1821)に飛騨総社を再興。歌学、管弦も教授。大正 4 年(1915)御即位の大典にあたり正五位。著書「竹取翁物語解」<sup>ようろう び せんべんちゆう え ちゆう</sup>、「養老美泉弁註」<sup>え ちゆう</sup>、「荏名冊子」<sup>え ちゆう</sup>、「土佐日記解」他。

⑤山岡鉄舟 天保 7 年(1836)～明治 21 年(1888)

政治家、書家、剣術家。江戸生まれ。21 代飛騨郡代・小野高福の長男。弘化 2 年(1845)飛騨郡代として赴任した父に同行し、少年時代を高山に過ごす。書を岩佐一亭、剣を江戸から招いた井上清蔵に、国学を富田礼彦に学ぶ。嘉永 5 年(1852)父が死去し江戸へ帰る。徳川慶喜の特旨を受けて西郷隆盛に面会し、江戸城無血開城の道を開くことに貢献した。幕末の三舟の一人と称せられる。維新後は新政府に出仕し明治天皇の侍従、宮内少輔、元老院議員など歴任。従三位、子爵。



山岡鉄舟

⑥広瀬武夫 慶応 4 年(1868)～明治 37 年(1904)

現在の<sup>おおひで</sup>大分県竹田市で生まれる。父が裁判官で、高山区裁判所所長を命じられたのに伴い、一家で高山に移り住む。高山では煥章学校に通い、卒業後そのまま代用教員として同校で生徒の指導に当たった。上京後、海軍兵学校に入学し、卒業後ロシア留学を経て駐在官となる。日露戦争開戦に伴い帰国すると、旅順口閉塞作戦において閉塞船福井丸を指揮する。撤退時に行方不明となった杉野孫七上等兵を助けるため船内を捜索したが見つからず、捜索を断念し乗った脱出ボート上で被弾、戦死した。死後、死の前日付けで海軍中佐となり、その振る舞いから「軍神」として崇められた。



広瀬武夫

## 4. 文化財等の分布状況

広大な面積を有する高山市には、平成 30 年(2018)2 月現在で 957 件という多数の指定等文化財が所在している。国指定の文化財は 38 件あり、有形文化財 22 件(うち国宝 2 件)、民俗文化財 6 件、記念物が 10 件である。また、重要伝統的建造物群保存地区が 2 地区、登録有形文化財が 18 件ある。県指定の文化財は 118 件、市指定の文化財は 781 件である。

### ■指定文化財件数（平成 30 年 2 月）

種 別		国指定		県指定	市指定	計	
		国宝	重文				
有形文化財	建造物	1	13	15	78	107	
	美術 工芸品	絵画			5	42	47
		彫刻		3	16	106	125
		工芸品	1	2	7	60	70
		書跡			5	32	37
		典籍			1	7	8
		古文書				87	87
		考古資料		2	4	46	52
		歴史資料			3	27	30
無形文化財					8	8	
民俗文化財	有形民俗文化財	4		4	38	46	
	無形民俗文化財	2		8	20	30	
記念物	史跡	4		17	104	125	
	名勝			1	10	11	
	天然記念物	6		32	116	154	
計		38		118	781	937	

### ■選定文化財件数（平成 30 年 2 月）

種 別	件数
重要伝統的建造物群保存地区	2

### ■登録文化財件数（平成 30 年 2 月）

種 別	件数
登録有形文化財（建造物）	17
登録有形文化財（美術品）	1

## (1) 国宝

本市には建築物 1 件、工芸品 1 件の計 2 件の国宝が所在する。

国府町に所在する安国寺<sup>きょうぞう</sup>経蔵は、飛騨地方で唯一の国宝建築物である。建立は室町時代初期の応永 15 年(1408)で、建物全体は<sup>からよう</sup>唐様(禅宗様)造りが中心となっており、一部に和様<sup>もこし</sup>が加わった折衷様式となっている。外観は裳階<sup>もこし</sup>付き入母屋造こけら葺となっており、一間一重<sup>いつけんいちじゅう</sup>の建物を重層に見せ、端部の反り上がる屋根が優雅である。下層には入り口上部の宝珠を中心にした弓張り欄間がはめられている。



国宝 安国寺経蔵

経蔵内部中央の八角<sup>りんぞう</sup>輪蔵には極彩色が施され、上部を飾る欄間は八方とも異なった図柄の彫刻が施されている。回転式の輪蔵としては国内における現存最古のものである。中心の軸一本で全体を支え、今でも数人で押すとゆっくりと回りだす輪蔵に、いにしへの匠の技を見ることができる。輪蔵には寺僧が中国に渡航して請来した木版一切経が納められており、持ち帰られた 5397 巻のうち、現在は 2208 巻が残っている。輪蔵は、これを一回転させると納入されている經典をすべて読誦したのと同じ功德が得られるとされている。



安国寺経蔵内の輪蔵

国宝芸術品は、光ミュージアム(中山町)が所蔵する<sup>たち</sup>太刀銘康次<sup>めいやすつぐ</sup>である。青江派の中でも最も長寸で、身幅が広く、豪壮な姿の太刀であり、刃文も大小模様を入り交ぜた華やかなものである。室町幕府 15 代将軍足利義昭が、薩摩の太守・島津義久に贈ったものと伝えられており、江戸時代になって島津家の家紋入り糸巻太刀拵が付けられ、儀式の際に使われた。

## (2) 国指定等文化財

建造物 13 件、美術工芸品 7 件、民俗文化財 6 件、記念物 10 件、計 36 件の指定文化財が所在し、重要伝統的建造物群保存地区 2 地区、登録有形文化財 18 件が所在する。

建造物は、市内の町家で最も古い江戸時代後期の建築である松本家住宅や、明治時代に建てられた豪商の町家である日下部家住宅、吉島家住宅が旧高山城下町に所在している。日下部家住宅と吉島家住宅は、江戸幕府による様々な規制がなくなった後、高山きっての豪商の財力の下で、名工と呼ばれた大工が腕を振った邸宅で、近代の町家建築として全国で初めて国の重要文化財に指定された建築物である。また、旧田中家住宅をはじめとする 4 件の農家建築や合掌造民家は、飛騨民俗村飛騨



の里に移築保存されているほか、丹生川町には大規模な農家建築の荒川家住宅が所在する。社寺建築では、国分寺本堂、照蓮寺本堂が高山地域に所在するほか、国府町には荒城神社本殿、阿多由太神社本殿、熊野神社本殿が所在している。

美術工芸品としては、彫刻 3 件、工芸品 2 件、考古資料 2 件がある。木造薬師如来坐像と木造観世音菩薩立像は、国分寺に所在する平安時代の彫刻で、後者は旧国分尼寺の本尊であったと伝わる。考古資料の浅鉢形土器は、片野糠塚遺跡から発掘された縄文前期後半における関東系の異質な土器で、口縁部が強く内湾し、そこに列孔がめぐる。全形が遺存している数少ない浅鉢型土器としてたいへん貴重なものである。

民俗文化財は、有形が 4 件、無形が 2 件指定されている。有形民俗文化財は、高山祭屋台（山王祭 12 台、八幡祭 11 台）のほか、飛騨のそりコレクションや荘川の養蚕用具といった農山村の生活用具が指定されており、無形民俗文化財は、高山祭の屋台行事と江名子バンドリの製作技術である。

記念物は、史跡 4 件と天然記念物 6 件である。史跡の高山陣屋跡は、元々は高山城主金森家の下屋敷（向屋敷）として使われていたもので、飛騨が幕府直轄地となってからは陣屋として代官や郡代がここで飛騨の政治を行い、以来、慶応 4 年（1868）に至るまで 176 年間、江戸幕府は 25 代の代官・郡代を派遣した。明治維新以後は高山陣屋の建物は高山県庁舎等として使用され、昭和 44 年（1969）までは飛騨県事務所として使用された。幕末には全国に 60 数カ所あったと言われている郡代・代官所の中で、当時の主要建物が残っているのはこの高山陣屋だけである。天然記念物には飛騨国分寺の大イチョウがあり、樹齢およそ 1200 年、目通り約 10m、高さ約 37m の巨木である。樹間の処々が乳のように垂れ下がっており、俗に乳イチョウの名がある。乳の出ない母親にこの樹皮を削りを与えると乳がよく出るといわれている。また昔から、国分寺のイチョ



荒川家住宅



浅鉢形土器



飛騨国分寺の大イチョウ

ウの葉が落ちれば雪が降るとも言い慣らされている。

重要伝統的建造物群保存地区は旧高山城下町に2地区が選定されており、それぞれ江戸時代の面影を残す伝統的な町家が建ち並ぶ。

登録有形文化財は、建造物が17件、美術品が1件である。建造物は、洋風店舗建築の天狗総本店をはじめ12件の建築物のほか、上宝町に所在する5件の砂防堰堤が登録されている。

## (2) 県指定文化財

建造物15件、美術工芸品41件、民俗文化財12件、記念物50件、計118件の県指定文化財が所在する。

建造物は、法華寺本堂や大雄寺鐘堂、国分寺三重塔など6件の社寺建築が高山地域に所在している。国分寺三重塔は飛騨で唯一の塔建築である。国分寺の塔は、天平13年(741)の国分寺の建立以来、幾度も再建されてきた。現在の塔は、寛政3年(1791)に前の塔が大風で吹き倒されてから31年後、庶民の喜捨浄財金800両と大工手間5500人工をかけて、文政4年(1821年)にようやく竣工を見たものである。棟梁は3代目水間相模であった。そのほか、旧西岡家をはじめとする8件の農家建築や合掌造民家が、飛騨民俗村飛騨の里に移築保存されており、荘川町の三島家住宅は、荘川の里に移築保存されている。



国分寺三重塔

美術工芸品には16件の彫刻があるが、そのうち5件は円空作の木像である。円空は寛永9年

(1632)美濃国に生まれ、一生のうちに12万体の仏を造ることを発願し、木像を刻みながら北海道にまで及ぶ諸国を訪れた。現在分かっているだけで5千体を超す像が全国に伝えられている。飛騨地域にも数度にわたって訪れ、円熟期の優れた像が数多く残されている。

民俗文化財は、有形が4件、無形が8件指定されている。有形民俗文化財は、高山祭屋台(飛騨総社と東山白山神社の神楽台)や朝日町のわらび粉作り道具などがある。無形民俗文化財は、高山おどりや国府町金蔵獅子などの伝承芸能のほか、久々野町小屋名地区で伝承されるざる作りの技術の小屋名しょう



円空作金剛神



けや、松之木町に所在する車田が指定されている。

記念物は、史跡が 17 件、名勝が 1 件、天然記念物が 32 件である。史跡は高山城跡や松倉城跡などの城跡が 6 件、田中大秀墓など高山ゆかりの人物の墓が 4 件あるほか、高山地域や国府町に所在する縄文時代や古墳時代の遺跡などが指定されている。名勝は国府町の宇津江四十八滝、天然記念物は日枝神社の大スギをはじめとして、市内各所に所在する樹木や化石などが指定されている。



高山城跡

### (3) 市指定文化財

建造物 78 件、美術工芸品 407 件、無形文化財 8 件、民俗文化財 58 件、記念物 230 件、計 781 件という、多数の市指定文化財が所在する。

建造物のうち、角正<sup>かくしょう</sup>は高山屈指の老舗料亭で、その格式のある構えが精進料理の料亭に相応しい風情を醸し出している。この建物は江戸時代文政期の郡代役所出入医、円山東齋<sup>まるやまとうらん</sup>の住居であったが、後に角竹家で購入し、料亭にしたとされる。当時の町医者<sup>まちい</sup>者は武家待遇であり、玄関正面及び右脇には武家の格式を示す式台が設けられているなど、高山では稀な武家邸宅の様式となっている。



角正

美術工芸品のうち考古資料の亀塚古墳出土品は、国府町にかつて所在した亀塚古墳から出土した副葬品で、甲冑や武器類などが指定されている。この出土品は 5 世紀初頭に造られたものと考えられており、甲冑の甲・鎧が一式そろって出土するのは全国でも稀で、たいへん貴重な遺物である。

無形文化財のうち管粥神事<sup>くだがい</sup>は、丹生川町旗鉢の伊太祁曾神社<sup>いたきそ</sup>において約 600 年続く神事で、約 6cm の麻ガラ（麻の茎）に、農作物の作況・気象・社会景気など約 140 項目の占い事を記した木札を付け、粥の材料となる米・大豆・小豆等と一緒に大釜で煮



亀塚古墳出土品(甲冑)



立て、釜揚げし神前に供えたあと、麻ガラを一つずつ切り開き、粥の入り具合で一年の吉凶を占うものである。

民俗文化財は、有形が 38 件、無形が 20 件指定されている。無形民俗文化財のうち松之木七夕は、松之木町内にある七夕岩で行なわれる行事である。七夕岩は、大八賀川の兩岸に立つ、男岩と女岩の二つの大岩からなる。毎年 8 月 6 日（古くは 7 月 6 日）に、男岩と女岩の両岩に大しめ縄を張り渡し、飾り提灯や、その年男の子の生れた家では藁の馬を、女の子の生れた家では糸巻きを吊し、牽牛織女の 2 星を祀って五穀豊穰を祈る。この行事は元禄時代以前か



松之木七夕

ら行なわれていたといわれ、他では見られない貴重な民俗行事である。

記念物は、史跡が 104 件、名勝が 10 件、天然記念物が 116 件である。史跡のうち松倉観音は、普門院、大悲閣、お籠堂からなり、通称松倉観音堂といわれている。元禄 5 年（1692）高山城主・金森頼<sup>よりとき</sup>峯が出羽国上ノ山へ移封された後、故あって高山を離れ京都の泉涌寺に入っていた天電高<sup>てんでんこうとう</sup>幢和尚が帰郷し、松倉山窟に馬頭観音の堂を建てた。これが普門院といわれている。松倉観音は素玄寺の守護により旧暦 7 月 9 日近郷の村人が堂の内外に宿泊し養蚕の繁栄を祈り、翌 10 日は村々の馬を飾り参詣し、牛馬の無病息災を祈願した。この風習が現在も松倉絵馬市として残されている。